



Title	謡歌百首 : バーラテンドウ・ハリシュチャンドラに 捧ぐ
Author(s)	ミシュラ, プラタープナーラーヤン
Citation	印度民俗研究. 1978, 5, p. 51-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50336
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

諺 歌 百 首

バーラテンドウ。ハリシュチャンドラに捧ぐ

プラタープナーラーヤン。ミシュラ

言 上

ここにお目に掛けますのはまこと差上ぐる値なき粗末な品にてございます。
世に「お日様に燈火」¹とか申します。しかしながら、この百粒の薬、印度國民の心をばむしばむ業病の治療にいさかかなりとも役立つものと愚考致します。
もしこれに諸賢の情深き眼差しを賜るならば、錦上花を添うと申すべき「黄金に香りを添うこと」²と相成りましょう。さればこそ、「山躋の心の印なる薪に木の葉」³をお受取り下さらんことを伏して願い上ぐる次第にてございます。

敬 白

カーンプルにて

ラーマ降誕日

プレーマダーサ。ミシュラ拝

ハリシュチャンドラ暦3年（西暦1887年）

慈愛溢るる神を拝み

群がる疑念を捨て去るべし

ひたすらに念じ励むならば万事成就す

「あれもこれもと念ずるなれば万事済ゆ」⁴といえり (1)

これぞ四聖典の精隨なり
ヴェーダ

耳底に深く刻むべし

「慈愛の二文字学ぶ者

まことの学者とならん」⁵といえり (2)

神は時空を超えておわします

ダーマ 四聖地の巡礼も益なきこと

何故に心眼を開いて見ようとなさらぬか

「抱いた子を村中捜し歩く愚か者」⁶といえり (3)

ヴェーダ ブラーナ
四聖典に 古譚すべて 暗誦し
呪文、苦行、願行に勵み命を捧ぐとも
神に捧ぐる誠心なくばいざこにか悦びを得ん
「吹けば飛び散る虫陰い粒よ」⁷といえり (4)

慈悲の倉、慈愛の館なる主を疎んじ
悪魔、幽鬼を拝む者が
如何にかかる知恵もて喜び幸せを得ん
タヒー
「乳 酪と書いて綿を食い」⁸といえり (5)

門派に囚わるるならば生死の輪を逃れ
解脱を得んものと悩み苦しむものなり
慈愛の道を歩めば何事にも執着をおぼえず
「やりもとりもせずかかわりもなし」⁹といえり (6)

負けは負け、勝つとも負けになる者に
説き聞かせるは全く無益なること
針の先など習えば天狗鼻、本性は如何ともなし難し
ギー
「牛 酪を注ぐとも苦棟(ニームの木)は甘くはならず」¹⁰といえり (7)

学び励めとあれほど説き教えられたに
民草の苦しみは去らず
のらくら者はいざこにても同じ
「ぐうたら宿六家の内でも外でも」¹¹といえり (8)

如何なる害を被るとも
わが本の姿、わが本の風、わが民の本を
ゆめさげすむなけれ
「とまれ身内は身内」¹²といえり (9)

露ほどの知恵なき者共が
バードレー
伴天連の教えに従うなり
異国の風を真似ればついには害を被る

「他所者に口づけすれど唾ばかり」¹³といえり (10)

おのが利を求めて人に害をなせば

苦海に沈むはこれ必定

ゆめ疑うことなかれ

「なしたるようく享くるもの」¹⁴といえり (11)

おのが全き力及ばぬに

威儀示すは無思慮というべし

ちとしくじりやしゅんとなる

「抜け作は人の財物の番をする」¹⁵といえり (12)

あの手この手奥の手つかい、おのが豊みを果たすがよいぞ

だれかれなしに一様に振舞えば、不快な目にあうものよ

相手次第に振舞うが賢者のしるしなり

「畠を鋤くには盲牛をこき使え」¹⁶といえり (13)

恥じらいを捨て

おのが目的果たす者には

かなわぬもの

「往還に齧すりつけ情乞いする盜入め」¹⁷といえり (14)

兄弟喧嘩の果ては他人の足下にひれ伏す

この骨肉の憎しみこそ

月なるインドを食らう触 ラーフ 鬼なり

「裏切者がランカー國を滅ぼす」¹⁸といえり (15)

はらからと争い

神に誠の心抱かねば

いざこにてもあなどらる

「力なればかかあは世間のからかいもの」¹⁹といえり (16)

互いに仲睦まじければ

苦勞はすべて消え失す

団結に勝れる力なし

「一足す一は十一」²⁰といえり (17)

アングレーズ
英吉利人はみな奪い去る

我等は口舌の雄

手足動かさず口先だけで何になろう

「雷鳴で魔法がとけようものか」²¹といえり (18)

わがことはわが手でなすべし

バルデーシー バルダルミー
異邦人、異教徒には一切期待できず

財宝と大地を奪つた者がどんなよいこととなそりものか

「ヒンドゥー行者に友なくムスリム行者に兄弟なし」²²といえり (19)

なにはさておき

自主独立を手に入れるべし

その意氣持たねば黙して足蹴を受けよ

「王のなすことこれ正義。なにが出ようと賭けは賽の目」²³といえり (20)

世故をわきまえねば

読み書き覚えたとてなにになろう

ことごとに物笑いの種となるばかり

「バラモンは本卦帰りしても抜けたまま」²⁴といえり (21)

世に散まわれてこそ

まこと立派といふもの

空威張りしてなにになろう

「家中ではみなお殿様」²⁵といえり (22)

体力、知力、学問、徳性、それに知識は

すべて ^{ハリ}神の支配下

まことみじんの疑いもなきこと

「運に恵まれてこそ成功す」²⁶といえり (23)

サンニヤーシー
出家は足るを知るべし

グリヒー
在家は財を蓄えるべし

手に入れたばかりで有頂点になるは愚か者

「ガガリー　スード　一壺の麦粉に肩をいからす下司野郎」²⁷ といえり (24)

過つて破局を迎へようとも
賢者は努力を怠らぬもの
つぶれた倉の一文に一万の値打あり
「夜逃げ男のふんどしでもとれ」²⁸ といえり (25)

なにごとも時を逃さず
正しい手立てを尽くすべし
時機を逸すれば利全くなし
「鳥がついばんでから悔んだとて」²⁹ といえり (26)

わき目もふらず書を読み
師友父母に尽くすべし
さればこそ
「栴檀は二葉より芳し」³⁰ といえり (27)

友と財とを蓄うべし
これあつての徳と取柄なり
さもなくば知恵も役立たず
「百人の栴檀羅も一人の貧乏人には及ばず」³¹ といえり (28)

貞節を守りて
婚家と実家で喜び享けるべし
ふしだら女はいずこにても嘲らる
「一度失えば二度と戻りこぬは誉れなり」³² といえり (29)

老いたればあらゆる欲を捨て去り
神の蓮の御足を頂礼すべし
この世のものを信ずるなかれ
「命の限り望みあり」³³ といえり (30)

力持ちは希望を失わず身を修むるもの
かほどのもので何になる、という者に唾すべし
如何ほどであろうとも光はあるにしかず

「ひま畠では虎の如き猫」³⁴といえり (31)

過ぎ去りし時にとらわれ
今なる時を
潰すべからず
「過ぎしは忘れ去り、先をば思うべし」³⁵といえり (32)

目指す仕事に障りが起きようとも
焦るべからず
倦まずたゆまず努めるならば事は成る
「はつたい粉たずさえどこどこまでも」³⁶といえり (33)

意気込んで始めながら妨げに
すぐ気力を失う者は
無駄な努力にて恥をかく
「レモンに塩なめへこたれる」³⁷といえり (34)

世間付合いあろうとも
わがことはわが手でなすべし
勇気ある人は名を惜しむ
「水は井戸を掘って飲むべし」³⁸といえり (35)

勤勉なる人、勇気ある人、意志堅固なる人、力持てる人は
自ずと人の上に立つ
これ世間も認めるところなり
「水牛は棍棒を持つ人に従う」³⁹といえり (36)

白く輝き流れるといえども
片や心を清め
片や正氣を奪う
「恒 河の水と唐綿の汁とは並びようもなし」⁴⁰といえり (37)

迷いを断ち
面子を捨て怠情を去って
富を手にすべし

「アシュタカバリー ダーリドリー 勤勉家に僕約家 いずこにても成しとぐ」⁴¹といえり (38)

口先では四聖 ^{ヴェーダ}典を唱えつつ
心では人の財物や女色に執着す
まこと驚の如き信心の徒よ、幸いなれ
「手には念珠、懷には匕首」⁴²といえり (39)

おのが行い改めず
御高説を撤き散らす
学者面に紳士面、呪われてあれ
「昨日の出家が大智。大覚」⁴³といえり (40)

守るべき道も守らず身を修めず
我執を捨てず愛をひろめず
その上樂を求める愚か者
「何の権限ありて湯をお求めじや」⁴⁴といえり (41)

真実、力量、利益に意を注ぎ
虚名を追うなけれ
偽りの位階にて楽の得られるはずもなし
「足もかなわぬに名は跳 ^{クータン}雄」⁴⁵といえり (42)

ナーガリー この上なき印度文字を捨てペルシア文字にかぶれるとは
自國のものをうちやり異国のものにいれあぐとは
かような見方。考え方なればヒンドゥーは苦しむが当然
「わが家の白のどをさし、くすねた黒砂糖舌をとろかす」⁴⁶といえり (43)

みなが己の歯かぶり
得意になれば
なにもかも話にならず
「銘々のタンバリン、銘々の名調子」⁴⁷といえり (44)

おのがために励みもせずに
世と仕事を呪う
怠け者の知恵は失せたも同然

「踊りも知らずに床くさし」⁴⁸といえり (45)

果のよさを見定めて
仕事にかかるが賢者なり
愚者の努力は効なきもの
「めくらが粉ひきや犬が食う」⁴⁹といえり (46)

しかけた仕事はなしとげよ
その後次にとりかかれ
一時にあれこれ考へてはならず
「行者増せば庵荒れる」⁵⁰といえり (47)

わが家のことを先ず大切に
他人のことはその後に
マハートマー
大聖はこれなくばそれなしと仰せじや
アートマ バラマートマー⁵¹といえり (48)

手足、頭の痛むほど日夜きびしく励んでこそ
富も力も知識、分別、学問も身につくものと知れ
怠ければ気づかぬうちにあとかたもなく消え失せる
「油屋は一滴を惜しみ ラヒマン 神^{クッパー}は(油入れの)大革袋をひっくりかえす」⁵²といえり (49)

力持たぬに
空しい期待を抱かせ
はぐらかしてはならぬ
ダーター
「すぐに音を上ぐ且那よりもしわいがまし」⁵³といえり (50)

官能に身を委ねれば
必ず苦を享く
快樂と病氣とは分かち難し
「黒砂糖は耳たぶに飾りの穴を開けてもらう子のみに」⁵⁴といえり (51)

おのが身も心も財も投げうち
人につくすが人の道
おのが利益のみ追うは賢者のなすところにあらず

「ろばさえも自分の腹は満たす」⁵⁵といえり (52)

限りなき知と徳は胸に秘められてあり
時を失すればこれすべて遺え
決まりたることもとどこおるなり
「天から降るもなつめやしの樹にひつかかる」⁵⁶といえり (53)

友には素直に従え
敵にはあの手この手奥の手あらゆる手を用いよ
それがこの世の幸せな過ごし方
「壁にあわせて絵を描け」⁵⁷といえり (54)

なにごともおのが力量に基き行うべし
力量以上に体裁をつくろい借金してはならぬ
金を借りれば気の休まる暇なし
「商人の挨拶は閻魔大王の伝言」⁵⁸といえり (55)

無駄金遣い
得た名は必ず
信用をつぶすもの
「月夜は四日、そしてまた闇夜」⁵⁹といえり (56)

身心ともに励むでなし
英吉利風にまるまるかぶれ
異人に嬉々と仕う
「果物を食いあさりたる揚句はさんざしの実」⁶⁰といえり (57)

常に弱きに味方すれば
神に愛でられ名をあげようぞ
弱きを苦しむるは徒労なり
「鷺を撃ちて得るは羽のみ」⁶¹といえり (58)

物腰常にやわらかく
されど曲者には気をつけよ
油断すればつけ入らる

「やさしき顔は犬がなむ」⁶²といえり (59)

世辞をつらねる人は
友にはあらず，我利我利亡者なり
それを見破るは賢者なり

「甘いもの欲しさに他人の食いさしを食う輩」⁶³といえり (60)

先を考えず氣ままに振舞う人をば
賢者は違えず愚者に數ゆ
たとい今日は喜び笑うとも明日は必ず苦を享く
「母野羊はいつまで安心しておれるやら」⁶⁴といえり (61)

苦の種となる弱点は
いともたやすく大きくなるもの
あなどるべからず
「毛布は湿るにつれて重くなり」⁶⁵といえり (62)

能なき者ははかりごとを大いに好む
口先でつくろい
おのが欠点をかくす
「かめ半分の水はおどりはねるもの」⁶⁶といえり (63)

瑕なきは神のみ
愚かにもおのがなしたるところを忘れ
他人の弱味を嗤うはまこと不届きなり
「いずれの家にも粘土のかまとあり」⁶⁷といえり (64)

しばらくは人を惹きつけようとも
欺き通せるわけでなし
化けの皮がはげようものなら到るところで嗤いもの
「警視をやめれば小心者呼ばわり」⁶⁸といえり (65)

富の酒に酔い痴れるならば
学なく知恵なく思慮なし
夢の中にも愛の道へは進まず

「男おんなの子を生みたるためしありや」⁶⁹といえり (66)

泣くとも笑うとも
天の定めた通りにしかならぬもの
知者はなぜに涙を流そう
「笑い声ありてこそ家は栄ゆ」⁷⁰といえり (67)

苦と楽とは
だれにもついてまわるもの
勇気を失うてはならぬ
「心で負けたが負け、心で勝ったが勝ち」⁷¹といえり (68)

友の秘めごと詮索するなれ
互いに意地張り
争い生ず
「かきませ過ぎれば毒となる」⁷²といえり (69)

家柄のみにて信ずるなれ
わきに離れ試し確かめよ
良家にも山ほどの出来損いあり
「わが家の米にわらすべ混ぜる不届者」⁷³といえり (70)

つましく暮らすべし
無駄遣いするは愚か者
「米の飯とお天道さまはついてまわる」⁷⁴という者は
苦しみもだえ命をおとすべし (71)

交際を引続き願うならば
判断を一層慎重になし
ゆめ遠慮すべからず
「仕事の出来は金次第」⁷⁵というべし (72)

贈りものは貧しき者に
金持に贈るは失うも同然
それを悟れば知力に忍耐力増すべし

「らくだの口にジーラー（クミンの実）とは」⁷⁶といえり (73)

定かなるものを捨て
定かならざるものに思い悩むなれ
この世は楽しく過ごすべし
「死人に解脱が役立つものか」⁷⁷といえり (74)

他人の言葉に耳を貸さず
おのが仕事に専念すべし
世間のからくりを気にとむるなれ
「人はみなおのが薄いたものを刈取る」⁷⁸といえり (75)

知恵あるものは
臨機応変に振舞うもの
頑固者には幸せ得られず
「腐るとも安売りはせず」⁷⁹といえり (76)

いささかなりとも役立つと見れば
あきらめるべからず
手をゆるめぬが賢者というもの
「指をつかんだならば手首をつかめ」⁸⁰といえり (77)

意志堅からずば何事もならず
如何なる訳あろうとも
千万のことを行ひめぐらそうとも何もなさざれば
「やはり靴^{モチ}屋^{モチ}は靴^{モチ}屋^{モチ}のまま」⁸¹といえり (78)

毀譽褒貶に出会わぬ人ありや
愚者の言葉に苛立つ丈夫ありや
ひとえにこれを信ずるならば道をそれることなし
象は堂々と進みゆく。「犬ころは吠え立てるもの」⁸²といえり (79)

小心のジャッカルは
おのが穴にひそみ死ぬ
獅子は異郷で

「殺したところで食らう」⁸³といえり (80)

この世に起とり得ぬことなし
瑕あるものの瑕も消ゆ
年寄り子供も知るところ
「金槌つぶれて斧となる」⁸⁴といえり (81)

おのれに害なしと知れば
世間体にも意を払うべし
得にもならぬにあざ笑わることもなし
「みなが猫というからにややはり猫じゃ」⁸⁵といえり (82)

人一倍働くべし
されど先頭には立つかれ
下端は仕事にしくじりや喧嘩をし
「長^{バレー}上はなべに落ちこみ油責め」⁸⁶といえり (83)

得意にも失意にも
度を失うことなかれ
度を失えば分別の明りは消ゆ
「過ぎたるはよからず」⁸⁷といえり (84)

好きな人のためにはみな耐ゆべし
されば必ず限りなき喜びを享くるなり
「美味きは己れに苦きは他人に」⁸⁸
というなれば、人を好く器にあらず (85)

賢き人、礼儀正しき人
品位ある人にこそ
ふさわしき振舞いなり
「高き人に交わるも媚びず」⁸⁹といえり (86)

天の怒りを招くなれば
この地の上に安らかなる所なし
知恵の限りを絞ろうとも

「駱駝に乗ったて犬にかまる」⁹⁰といえり (87)

おのがなすべきことを人に委ねるなかれ
それを見て如何なる痴者が
口出しするやも知れず
「牛が跳ねずに荷が跳ねた」⁹¹といえり (88)

運悪しく失販したならば
痛みは胸のうちに秘めおくべし
出来る限り人に知れぬよう
「わしが獲物の逃げぬよう」⁹²といえり (89)

損多しと知れば
わずかの利益はあきらめよ
分別ある人の避くるところ
「五銭の鳥に五十銭の羽さばき」⁹³といえり (90)

全滅に臨みても落胆するなかれ
あらゆる術にて備え手を打つべし
これ数多の書の教えるところ
「財を失うと見れば分けて半分をとれ」⁹⁴といえり (91)

五人が力を合わせれば
難事も
容易になるべし
「五人に一本ずつの薪も一人に五本では荷になる」⁹⁵といえり (92)

だれの話であれよく聞き
要点を聞きとるべし
だれしも己を大きく見せたがるもの
「結婚式では婿のほめ歌を歌うべし」⁹⁶といえり (93)

ためになることをやさしく言えば
人の心をとらえるもの
同じこともきびしく言えばあなどり招く

「歯に衣着せねばうとまるる」⁹⁷といえり。(94)

先人の言にあり

「天は徳と不徳とを混ぜ合わせたり」⁹⁸といえり

されど、分別の眼持つ人には見ゆるものなり

「ほこりにまみれても黄金は光る」⁹⁹といえり (95)

徳や知識を授かる際に

利口ぶってはならず

さもなくば評判おとす

「飼主にニヤーオと目をむくとは」¹⁰⁰といえり (96)

よき交りに時を費すならば

何事にも上達す

なにもかも教えてくれる人があるでなし

「警視の仕事は椅子に教わる」¹⁰¹といえり (97)

おのがため

家がため国がため

なすべきことあらば

「明日の仕事は今日、今日の仕事は唯今」¹⁰²といえり (98)

如何なる人が如何様にあろうとも

きびしい言葉は用いぬこと

何事も本人の運次第

「良く言うて損することもなし」¹⁰³といえり (99)

この世では

手をこまねいて

坐してはならず

「深き水に入りて求めたる人のみ手に入れたり」¹⁰⁴といえり (100)

ここにやつがれプラターブ

世に知られたる諺を

選り集め歌うた次第

「人それぞれに願いに応じたる果を得る」¹⁰⁵といえり

善哉善哉

[訳者あとがき]

以上は次を訳出したものである。 Pan̄dit Pratāp Nārāyaṇ Mishra, Lokokti Shataka, Khadgavilās Press, Patnā, Pratham Vār, 1896 (Harishcandrābd 12)

諺の本質に関する制約のため訳出にあたっては、可能な限り意訳よりも直訳により原文の表現の味わいを活かすよう工夫した。諺以外の部分が意味及び用法をかなり説明しているからもある。序文に見出されるものも含め諺すべてに一連番号を付し、ナーガリー文字による検索ができるよう下に索引を掲げた。ただし、これら著者の数えた諺をすべて諺の範囲に含めるには異論があろう。たとえば、諺(3)及び(98)はそれぞれ Tulasīdāsa の ‘ Rāma Carita Mānasā ’ の一節((3): Ayodhyā Kāṇḍa 251 – 1, (98) : Bāla Kāṇḍa 6 – 2)である。なお、諺(87)のバレー(bārē)は「長上、上位の人」と「豆粉を用いた料理の一」とにかけた掛詞である

訳出にあたって Dr. L. D. Malaviya に御助言をいただいた。ここに感謝の意を表する。

諺 索引 (デーヴァナーガリー字母による)

() 内の数字は訳文中の諺の一連番号

Āgurī pakarat pāhūcā pakarai (80)	Utrā sahnā mardak nāw (68)
Āndan kē ban mā bilārui bāgh hot hai (34)	Us dātā se sūm bhalā jo jaldī dey jawāb (53)
Att bahut acchī nañī hotī (87)	Ūt ka mūh kā jirā (76)
Adhjal gagari chalakat jāy (66)	Ūt carhē par kūkur kataī (90)
Apan pēt gadahau bhar let (55)	Ek ek mil gyārah hoy (20)
Apnā ullū kahī na jāy (92)	Ekai sādhē sab sādhai, sab sādhē sab jāy (3)
Apnā phir bhī apnā hī hai (12)	Kaniyā larikā gāw guhāri (6)
Apnī apnī dāphli, āpan āpan rāg (47)	Kahu tātken gājai tārti hāi (21)
Apne ghar kē rājā sab hāi (25)	Kālhi karante aj kar, aj karante abb (102)
Āstkapārī dāridī, jañā jāy tāhā siddhi (41)	Kālhi ke jogī māi māi (43)
Ākhin dekhe cēt nā muh dekhe vyohār (89)	Kis birte par tattā pānī (44)
Ādhār bail bhāwāy kē jotā jāt hai (16)	Kuwā khodi kai pānī piyai (38)
Ādhī pīsai kuttā khāy (49)	Kūkur bhūkai karat hāi (82)
An kā cūme mūh bhar lār (13)	Khari kahaiyā dārhī jār (97)
Āpan bawā lunai sab koy (78)	Khari majūrī cokhā kām (75)
Ādhāna pāta kirāta mitai (3)	Gangā madār kā kaun sāth (40)

Gagrī dāni sūd utānā (27)	Pahili ētmā phir paramātmā (51)
Ghar kā bhēdiyā lankā dāhu (18)	Pač kahai billi to billi (85)
Ghar kī khānd khurkhurī lāgai corī ka gur mīthā (46)	Phir pachitāe kyā huā jab ciriyā cug gai khet (29)
Ghar kē dhān payār milāe (73)	Pher wahī mocī kē mocī (81)
Ghar ghar matti kē cūlhe hai (67)	Bakurā kai mahatārī, kab lag kusal manāī (64)
Calai na pāwai kūdan nām (45)	Bakulā māre pakhnā hāth (61)
Cār dinā kī cīdnī, pher adherā pākh (59)	Bare kaṛāhī mē partē hai (86)
Cautarā āpahī kutāwalī sikhā lətā hai (101)	Bani ē kī bani ī hai (26)
Chūch pachore urī urī jāy (7)	Bahut mathe phir biś nisarat hai (72)
Jab lag swāsā tab lag āsā (33)	Bahutai jogin matihī ujār (50)
Jahā mārai tāhā khāhī (83)	Bādhai marai ki takā bikāy (79)
Jin dhūdhā tin pāiyā, gahire pāni paith (104)	Bāt gaē kachu hāth nahī hai (32)
Jis kā byāh usī kī git (96)	Bidhi prapanc gun augun sānā (98)
Jihi kai lāthī tihi kai bhainsī (39)	Bītī tāhi bisār de, āgē kī sudhi ley (35)
Jūth khāy mīthē kē lālac (63)	Bail na kūdā kūdī gaun (91)
Jaisā karai so taisā pāwai (14)	Brāhmaṇ sāth baras lag pōg (24)
Jaisī jākī bhāvanā, taisī tākī siddh (105)	Bhalā kahe kā jāy (103)
Jaise kāntā ghar rahe taise rahe vides (11)	Bhāge bhūt kī lagotī hī bahut hotī hai (28)
Jogī kākē mīt kalandar kehī ke bhāī (22)	Bhīt dekhi kai citr urehai (57)
Jo gur khāy so kān chidāwai (54)	Man ke hāre hār hai man ke jīte jīt (71)
Jo dhan dekhīs jāt, ādhā lijai bāt (94)	Mare mukti kehī kāj (77)
Jyō jyō bhijai kāmari tyō tyō garuī hoy (65)	Mīthā mīthā gapp, kaṛwā karwā thū (88)
Dhāī akshar prem kē, parhai so pañgit hoy (5)	Merī billi mujhī se myāw (100)
Teli jorai parī parī rahimān lurhāwai kuppā (52)	Rājā karai so nyāw hai, pāsā parai so dāw (23)
Damaṛī kī bulbul takā halāl (93)	Rām khabariyā lebai karihai (74)
Dahī kē dhokhē khāy kapāsu (8)	Lenā ek na dēnā doy (9)
Dhāse dhāse ghan kulharā hoy (84)	Vyauhare kī rām jam kā sādesā (58)
Nangā parā bajār mā, cor balaiyā lei (17)	Sab phal khāy dhatūran lāge (60)
Nāci na āwai āgan terh (48)	Sarag te girai khajūr mā atkai (56)
Ninbuā non cāti kai rahige (37)	Sāt pāc kī lākarī ek jane kā bojh (95)
Ninbare kī juiyā sab kai sarhaj (19)	Sūdhē kā mūh kuttā cātai (62)
Nīm na mīthī hoy ju sīcau għiwl te (10)	Sūraj ko diyā dikhāne se kyā (1)
Par dhan bādhai mūrakhcand (15)	Setuā bādhī kai pāče parau (36)

Sonā dhūl mē bhi camkai hai (99)
Sone mē sugandh hai (2)
Sau candāl na ek kāgāl (31)
Haste hī ghar baste hai (70)

Hāth sumirnī bagal katarnī (42)
Hijrō ke kab larkā huwā (69)
Hot biraunā cīkan pāt (30)

(訳　古賀勝郎)